

ミレニアム・プロミス・ジャパン 第20回研究会

Discovering Burkina Faso and Its International Cooperation For Development

- 【講師】**
- ① フランソワ・ウビダ大使閣下（ブルキナファソ駐日大使）
（英語でのスピーチ）
 - ② ルミエール宗田芽理沙
（特定非営利活動法人ミレニアム・プロミス・ジャパン インターン）
（日本語でのスピーチ）

【日時・場所】 2013年9月5日（木）午後6：30～午後8：15
日本財団ビル 第3・第4会議室

- 【概要】**
- 1. フランソワ・ウビダ大使のご講演
 - 2. 質疑応答
 - 3. ブルキナファソでの教育支援体験の報告
ミレニアム・プロミス・ジャパン インターン ルミエール宗田芽理沙

1. フランソワ・ウビダ大使のご講演

■ ブルキナファソの基本情報

ブルキナファソはマリ、ニジェール、ベニン、トーゴ、ガーナ、コートジボワールの6か国に囲まれた、西アフリカの15か国のうちの1国である。

首都：ワガドゥグ

国土：日本の70%ほど（274,200Km²）

人口：1600万人

公用語：フランス語

政体：共和制

経済成長率：過去10年で5.3%

インフレ率：3%

通貨：CFAフラン（100円=480CFAフラン）

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

一人当たり GNI : 510US\$ と低い
平均寿命 : 56.7 歳 (女性の方が男性より長い)
成人識字率 : 29%
初等教育就学率 : 70%
中等教育就学率 : 15%
教育に関しては大きな課題が残る。

■ ブルキナファソの歴史

1984 年に、それまでオートボルタと呼ばれた国名からブルキナファソになった。
地理的理由から旧宗主国フランスから与えられたオートヴォルタ (ヴォルタは川という意味) は民意を反映していないという理由から、国名が変更した。
1991 年に新しい憲法が制定され、大統領制の共和国になる。
「ブルキナファソ」とは、60 ほどある民族の言葉の中の一つでブルキナは「高潔な」、ファソは「人々の地」という意味で、全体で「正直で高潔な人々の国」ということになる。

■ ブルキナファソが直面しているチャレンジ

・ 地理的チャレンジ

海に面していない。雨季と長い乾季があり、慢性的な水不足である。
飲み水や農業用水の確保のため、ダム建設や地下水掘削で解決を試みる。

・ 農業面でのチャレンジ

伝統的な方法で行われることが多いため、トラクターなどの技術を使った場合に比べ、収穫量や収穫スピードが大きく劣る。しかし、地元だけではなく輸出品目も (綿花・ゴマ・フルーツ・野菜・シアバターなど) 作られている。

・ 教育面でのチャレンジ

就学率は 80% で、多くの児童が学校に通えていない。政府は全児童が就学できるように努力している。また、たとえ学校に通えたとしてもクラスルームが足りず、1 クラスに生徒が溢れて学習効率の悪い現状がある。

・ 健康および衛生状況でのチャレンジ

これはブルキナファソの最大の課題である。
日本に比べてブルキナファソの平均寿命が低いことの大きな理由として、高乳児死亡率があげられる。(1000 人中 204 人亡くなる) 死因としてはマラリアや感染症、エイズ、汚染水の使用がある。

■ 特徴的分野 : 鉱業

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

前述のチャレンジにも関わらず、ブルキナファソでは鉱業が盛んである。
マンガン・金・マグネシウム・亜鉛・りん鉱石が取れ、昨年は 40t の金の採掘実績がある。

■ 町と村のコントラスト

都市と地方の村ではかなりの違いがあり、都市においては交通の便もよく、首都はかなり近代的である。首都を「首都」足らしめるためにかなりの努力が成されてきており、その甲斐もあって観光客を引き寄せている。

一方、首都の外では伝統的な村も観光地として人気だ。伝統的な家では、エアコンは不要。暑いときにも部屋の中は涼しいような工夫が見られる。

■ 市場

市場も生活にとっても重要である。どの村にも市場があり、経済の源になっている。雨季の間は人々の交流の場にもなり、物々交換がされている。

■ ブルキナファソの文化と伝統

その分野においては「アフリカの首都」と呼ばれるほど、手工芸が盛んである。

2012 年のワガドゥグ国際工芸見本市では日本は招待国であった。

全アフリカ映画祭などの国際的なイベントもしばしば開かれている。

■ ブルキナファソの自然・多様性

自然の多様性も素晴らしく、砂漠から動物たちが多く生息するような地区まである。滝や博物館も充実している。

■ ブルキナファソと国際協力

2000 年から MDGs にも参加しており、2015 年までには何等かの進歩が認められることが期待されている。また、その達成のために、隣国との協力の必要も認識している。中でも貧困問題を重視している。

・ 人間の安全保障

貧困が少なくなったとの報告があがっている。

子供の栄養状態は 1994 年から比べて 15%以上も改善されている。

これは政府の努力だけでなく、農業に対する強い国際支援の賜物でもある。

・ 雇用創出

技術トレーニングによって人々が何らかの職に就けるように、あるいは若者や女性が職に就けるような努力を政府はしている。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

- ・ 全国民への教育

教育の面においては特に女の子や女性の教育に力を入れ、すべての子供が教育を受けられるように努力中である。

- ・ 衛生面

乳児死亡率の低下による平均寿命の向上を目指している。

マラリア・下痢などの病気の撲滅、母親の啓もう活動に注力している。

- ・ 母親の健康状態向上

孤児の撲滅や母親自身の健康促進のためのプログラムが組まれている。

- ・ エイズの撲滅

アフリカ機関の活動に賛同し、エイズ、結核、マラリアなどの病気の撲滅を目指している。現段階では、90年代は7%だった感染率が、今では2%以下になっている。

- ・ 安全な水へのアクセス

政府の重要課題のひとつである。日本政府の協力によって安全な飲み水へアクセスできる人口が増えた。

■ 平和・安全保障

アフリカには紛争が多くあったが、政府の方針としてどのように攻略できるかが長年の課題となっていた。

紛争のため仕事に行くことができない人もいし、何もできなくなる。「平和がなければ発展もない」との考えのもと、日本、中国のような国と関係を強化して取り組もうと注力している課題である。

■ 他国との関係構築

課題解決のためにも、他の国との関係を強化しようとしており、2011年までは大使はいなかった日本に大使を派遣していることから分かるように、特に日本とはそうである。他にも貿易に関する協定、投資に関する協定、輸出入に関する取り決めなどを他国と結ぼうとしている。韓国、インド、シンガポール、台湾とアフリカとのパートナーシップにもブルキナファソは参加しようとしているし、エコノミックフォーラムにおいてブルキナファソの輸出品目を売ろうとしている。

日本とのことでいえば、1960年独立した後からの関係である。日本大使館もブルキナファソにあるがそれだけでなく JICA や JOCV の事務所も開設している。

このように政治的・経済的関係を強化している。

2. 質疑応答

Q1: 国際文化イベントに興味があるが、政府によって開催されているか、それともプライベートセクターによって開催されているのか？アフリカ文化の中心として、ブルキナファソの政府はどのようなことを目指しているか？

A1: 文化とはなくてはならないもの、文化無しではいったい自分が何者であるか分からなくなってしまう、そういう非常に大事なものだと考えている。フランスからの独立後、ブルキナファソは独自文化喪失の危機にあった。伝統を失いかけていたが、後々の世代にとっても自分たちの歴史・文化を知っておくことがとても重要だとのことからイベントなどを通して文化を残したいと思っている。

アメリカやヨーロッパなどの他の国が描くアフリカではなく、アフリカ自身が自らメッセージを発信するために、FESPACO（ワガドゥグ全アフリカ映画祭）は重要な場であった。FESPACOはアフリカの国々だけでなく、アフリカに起源を持つディアスポラからも強くサポートされている。工芸品の分野では、このような国際イベントは、世界中にブルキナファソの工芸品と人々の可能性を発信することを可能にしている。開催は政府によるが、参加者は映画制作会社・工芸品製作者のようなプライベートセクターも多い。そして、ビジネスやパートナーシップ強化の場にもなっている。

Q2: 日本はアルジェリアの事件に大変ショックを受けた。アルジェリアだけでなくニジェールやリベリアの状況についても不安があるが？マリで起きたことにブルキナファソへの影響は？

A2: テロリズムはアフリカだけでなく世界中の課題である。また、テロの撲滅は国連の最重要課題の一つでもある。ブルキナファソ周辺でこの問題がクリティカルになったのは特にリビア、アラブ地域で起きたことの後である。更に、マリでの事件は国際社会に大きな衝撃を与え、過去にない程に対テロリズムの姿勢を見せることになった。そのような中、ブルキナファソは即座に国境の安全を確保することに従事した。500名の軍隊をもってテロリストのグループがブルキナファソ内に侵入することのないようにしたのである。この行動はとても適切だった。なぜなら、多くの人がテロから逃げようと国境を越えようとており、国境付近での人々の出入りをコントロールすることができたからである。10万名を超える難民がブルキナファソに逃げようとしていた。マリでは軍事政権下であり、反乱を止めることもなかった。そこで、大統領は軍事政権から権力を奪還し、新たな政権を樹立する戦略を立てた。他国も巻き込みながらのこのような一連の努力の末、今言えることはマリは現在とても安全になったということだ。選挙も行われ、新しい政権も樹立した。ブルキナファソも新政権との協定を結んだ。ブルキナファソはこのような隣国に対して現在は恐怖や不安は無いと言えるだろう。日本政府も今となってはこの地域への警戒レベルを下げていることから分かるだろう。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

Q3: ブルキナファソの多様な西アフリカの国々での「位置」はどのようなものであるか？アラブ文化、サブサハラ文化が交差する西アフリカにおいてその状況は経済面・文化面でブルキナファソにとってどのような影響を与えているか？

A3: 平和なしに発展はない。互いの文化や価値を理解し合えば、紛争やもめごとなどはないはずである。もし紛争が起きた場合、ブルキナファソは隣国に囲まれた海のない国であるため、逃げ道はないという想定がある。そこでブルキナファソは昔から隣国と協調していこうという考えをもっている。

まず、「協調」の第1ステージとして東アフリカと西アフリカの協調を目的とした ECOWAS（西アフリカ諸国経済共同体）という組織を挙げたい。ECOWAS には 15 の国が参加しており、多様な文化が共生している。異なる文化同士がお互いをより豊かな存在にしている。この組織の目的は協力・協調であるが、特に経済の分野での協調を目指している組織である。しかしそれに留まらず①食糧についての協力②発展に関する協力③文化の促進④人々の協調、これらに対する努力を行っている。また、選挙によって選ばれた議員で構成される議会や、一国の政府では対処しきれないような問題が起きた場合のための国際裁判所も持っている。ここからも分かるように、我々は文化的・政治的・経済的発展のための協力をとても重視している。

ECOWAS の他にはアフリカ連合がある。これは、アフリカの発展を目的とした組織である。そして ECOWAS やアフリカ連合以外にも、ブルキナファソはほとんどすべてのアフリカの国と 2 年に 1 度のペースで会議の場を設けている。

以上のことから、ネガティブな課題もたくさんあるものの、アフリカの持つ文化の多様性は、ブルキナファソにとって強みになっていけると言える。

Q4: 台湾とアフリカとのパートナーシップについてプレゼンで話があったがその点についてもう少し聞きたい。中国との関係からアフリカの国々で台湾との関係を断つ国もあるようだが？

A4: ブルキナファソと中国の関係は 1972 年から 1994 年まで続いた。ブルキナファソは、中国と台湾は同じ民族であり、両国の関係が良ければほかの国々にも良い影響があるとして両国できちんとした話し合いの機会が必要だと考えていた。近年では中国と台湾の関係が特にビジネスの場面ではだんだん良くなっているように思う。また、数年後には中国と台湾の間には違いはなくなると信じている。政治的・経済的にはブルキナファソとしては中国と台湾の間に大きな違いはないが、現実的にはブルキナファソのビジネスマンたちは中国への関心が高いようではある。

3. 『ブルキナファソでの教育支援体験の報告』

ミレニアム・プロミス・ジャパン インターン ルミエール宗田芽理沙

■ プロジェクト紹介

Agir Alternatif とはフランス語で「通常と違う活動」という意味であり、2008 年から存在する

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

グルノーブル政治学院の学生団体だ。現在の現況について論議したい学生、局地協力、また国際協力のプロジェクトに関わりたい学生を対象にして、ディスカッショングループ・福祉問題グループ・環境保護グループ・国際協力グループの四つに分かれている。

私はこの団体の国際協力部に所属してブルキナファソでの活動に参加した。2011年-2012年度には8人（女子7人・男子1人）参加した。男子はパリの大学生であり、他は皆グルノーブル政治学院の学生だ。このプロジェクトは2010年に開始され、学生が現地に行くのは今回で3回目だ。

このブルキナファソでのプロジェクトは元々ブルキナファソ人の父親を持つフランス人の学生によって始まり、彼の父親、ウエドラオゴ・ブレイマさんが現地でのパートナーとなっている。ブレイマさんはオロダラ県のTin村で農家を持っていて、プロジェクト開始の何年か前にそこで中学校ークラスを開いた。その学校は公立の中学よりは少し高いが、私立よりは安く、教育環境はいいほうだ（例えば、他の学校より生徒数は比較的少ない、通常80-100人のところ、ここでは40人。また、パソコンも二台あり、パソコンの授業も受けられる。図書館もある）。この学校がなければ教育を受けることのできない周りの貧しい村の子供達のために開かれた正式な学校だ（ただしークラスしかない）。夏の補修は日本の塾みたいなものだ。

私達のプロジェクトは普通の授業以外に補修を希望する生徒達にフランス語と数学の塾を行うことであり、目標は彼らが中学の卒業試験に受かることだ。この試験はフランスにもあり、中学で習う知識をきちんと認識しているかどうかを確かめる国立試験だ。通常14歳・15歳の学生が受ける試験だが私達が教えていた生徒達は15から20歳だった。この試験に合格しないと高校には進学できない。試験は毎年6月におこなわれるが、私達は彼らが中学2年を終えた時に行ったので、試験を受ける1年前になる。プロジェクトは「卒業証書を皆に」というブルキナファソのNGOと提携している。残念ながら現在このブルキナファソでのプロジェクトは中止となっていて、今年国際協力部の学生達はトーゴの首都のロメから約100km離れた村で一ヶ月間補修を行うという新たなプロジェクトに活動を継続している。

現地での活動は7月末から9月の始めまでの6週間だったが、実際に行く前の準備も多くあり11月頃から準備に関わっていた。一番重要なのはもちろんお金を集めることだった。県や市、またこういう学生団体を援助する団体などの補助金のための書類準備がとても大変だった。学校からも少しは援助をもらったが団体が四つのグループに別れているため実際このプロジェクトで使えるのはもらう金額の1/4だった。他にケーキなどを作りそれを学校内で売るということもした。現地の大学生と大学の教授と行う研究会に参加するのでその準備もあった。研究会のテーマは「宗教、民主主義、非宗教性」だった。

■ 現地での活動

全部で6週間ブルキナファソにいた。その内の4週間補修をし、1週間研究会に参加した。残りの一週間主に観光をして過ごした。

最初の三日間は首都のワガドゥグで、ブレイマさんの家で過ごした。着いてすぐに印象に残ったのは湿気の多さと土の匂いだ。そして初めて通常5人乗りのタクシーに8人で乗った。着いたのが

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

夜中だったので外の景色は何も見えないまま家に到着した。ブレイマさんの家は比較的豪華な家で、水道と電気があったため、よく近所の人が水を汲みに来ていた。寝る前の蚊帳釣りがとても大変だった。ワガドゥグではフランス大使館での申請、両替などを済ますとともに町の様子なども見ることが出来た。バイクの数に驚いた。車よりもバイクのほうが非常に多い。前の年に来たことのある二人の現地の友達に市場などを案内してもらったり、一緒にお茶も飲んだりした。私達がいる間は、エステルという名前の女の子がご飯を作ってくれた。メインはお米とパスタにソースをつけたものだった。エステルさんは最初のころはとても恥ずかしがりやだったが、少しずつ仲良くなった。

私達が補修のプロジェクトをしたのはオロダラ県にある Tin という村だ。ワガから約 5 時間バスにのりボボ・ディウラツソで一回乗り換えて 1 時間半かけてオロダラまで行き、そこから村までは車で行った。農家は村から離れていて水道も電気もない。なので、シャワーはバケツで水を汲んで浴びて、午後の 7 時にはもう真っ暗なので懐中電灯でなんとかかすませた。

最初の一週間は「宗教、民主主義、非宗教性」についての研究会が行われた。ブレイマさんはワガの大学の教授であるため、他の教授や学生も参加し、とても興味深い論議を行うことができた。フランスとブルキナファソは宗教に対する政策が違う。フランスでの「非宗教性」とは政治と宗教を別にするだけではなく、公共な場所で宗教色を見せないということでもある。だが、ブルキナファソは違って、逆にどの宗教でも共に生きる、公共な場所でも宗教は普通にみせていいということだ。また、フランスでは無宗教の人が多いが、これはブルキナファソ人には考えられないことだった。このときの議論では、フランスでは宗教による問題が多く起こっているが、ブルキナファソでは皆共に生きているという検証から、もしかしたらフランスは非宗教性を考え直すべきではないかという結論が出た。

補修は全部で 4 週間行った。生徒は中学 2 年を終えた 20 人だった。まず、授業を始める前に村長さんに挨拶に行った、それが習慣だ。そうして生徒達の親を対象に説明会をした。何か提案など、授業でやってもらいたいことなどを話すためだったが結局すぐのお金のお話になってしまった。彼らは学費を払うのに苦労して、払わない親もたくさんいる。その結果先生へのお給料が払われず、先生がこなくなってしまったのだ。英語の授業もするようにと頼まれたが、フランス語でも苦労していて、試験では英語はそんなに重要ではないことからフランス語を優先することに決めた。

生徒達に初めて会う日はとても不安だった。先生なんてやったことのない私の授業をわかってくれるのだろうかなどが心配だった。初日は互いの名前を覚えるためのゲームをし、午後には生徒達をレベルごとに分けるためのテストをした。全生徒を教室に入らせるととても狭苦しいため、一部は外で授業をした。補修は朝 3 時間、午後 3 時間だった。

私は数学を 5 人の生徒に教えた。比較的レベルの高いほうのグループだったので中学 2 年と 3 年生の数学をしたが、フランスの同級生と比べたらレベルは低い。合宿だったので授業が終わると皆でサッカーやトランプなどで遊んだりして仲良くなったが先生と生徒という違いはいつも守るようにしていた。教育環境はかなり厳しかった。20 人の生徒に対して教科書は一冊しかない、鉛筆や紙が足りないなどいろいろあった。私達は補助金でもらったお金は全てプロジェクトのために使うと決めていたので、現地で生徒達のために文房具や教科書、本などを買った。また、フランスから

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ゲームなども持っていった。雨季だったので雨が降る日が多く、雨が降ると屋根がトタンでできているのでうるさくて授業ができない状態になる。雷に怖がっていた私達を生徒達が安心させてくれたこともあった。慣れない環境での授業で最初はかなり辛かったが、生徒が説明したことを理解し、自ら問題を解いて笑顔で答えを見せてくれるとやる気が出た。私は生徒のやる気に驚いた。休憩時間にも関わらずもっともっと問題を出すようにと頼まれたり、翌日までの宿題をだすようにも頼まれた。フランスでは宿題が出るといやがる生徒が多いし、私も嫌がっていた。それに比べたらこの子達はすごいなと思った。空き時間にはよく食事を作ってくれていたエステルさんにも数学を教えた。

授業の最後の日には皆でオリンピアードをし、ごほうびとして飴と皆で撮った写真をあげ、生徒達にとっても喜ばれた。オリンピアードとはチーム分けをして複数のゲームをし、一番多くの点を獲得したチームが勝つという遊びだ。生徒はカバ組、ヒョウ組、ライオン組、ゾウ組と4チームに分かれた。袋競争、数学の問題、なぞなぞ、などいろいろなゲームをした。(棒を21本ならば、格チームの代表が順番に1本から3本まで棒を引く。最後の一本を引いたチームが負け)。最後宝探しをしてゲームは終了した。そうして、最後の日には4週間皆で練習した劇を生徒達が親の前でした。私達は練習の手伝いをしただけであり、劇には参加していない。親の多くはフランス語を話せず、生徒達が現地語で訳した。最後のお別れはとても辛かった。この時点でプロジェクトが中止になると私達はすでに知っていたが、生徒達はまだ知らなかったため「来年も来るよね」「また来年ね」などと言われた。

週末はかならずボボ・ディウラツソというブルキナファソで2番目に大きい町に行った。そこでは水道と電気が普通にあるためシャワーなどが浴びられた。また、現地のグループ(主に男子、ブレイマさんの甥の友達)と親しくなりいろいろ案内してくれた。彼らとはよく夕方お茶を飲んだ。ブルキナファソではお茶の時間がとても重要で、友達と過ごす大切な時間だ。ブルキナファソのお茶は、泡立てさせるために何回も何回もコップに入れ替え、炭で温めるから、非常に時間がかかる。泡を立てるのはとても難しく、泡がないお茶は失敗となる。一時間でできるお茶の量は非常に少なく皆で分けて飲む。私も友達と造り方を教わってやってみたが、出来上がる前に熱くて全部こぼしてしまった。現地のグループはイスラム教だったのでちょうどラマダンの時期だった。昼間市場を案内してくれた人にうっかり「水飲む？」と聞いてしまったこともあった。先ほどお話ししたように、彼らにとって無宗教とはありえない、考えられないことだ。私も無宗教のため、宗教は何かと聞かれて無宗教だと答えると、すぐに選ばないと駄目だとか、いや宗教は絶対あるはずだなどとよく言われた。ボボのグループは私達のことをすぐに家族の一員として受け入れてくれて(友達は家族)、ラマダン終了のお祝いも一緒にし、彼らの家族に挨拶に行ったりした。彼らとのお別れも非常に辛かったが、今でも連絡は取り合っている。

■ 感想

正直、ブルキナファソに行くまではアフリカに興味は全くなく、遠い大陸であり多分一生行くことのない所だと思っていた。実は、このプロジェクトに参加したきっかけは進学のためだった。日

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

仏環境でずっと育って来たためグルノーブル政治学院の国際関係のマスターを希望しており、国際協力の経験がある人のほうが入り易いと聞いたので、ちょうど学校内にあるこのブルキナファソでのプロジェクトに参加することを決めた。出発直前まですごく不安で、何回もどうして行くことにしちゃったんだろうと思うことがあった。

最初の数日間は、生活環境が全く違い、フランスや日本ではあるのが当たり前な水と電気がないのがとても難しかった。でもそれと同時に新しい国、文化を知ることが楽しく、生活環境には慣れ、電気と水の大切さを実感した。ブルキナファソでは、フランスと違い、知らない人に声をかけて話すのが普通であり、互いに助け合うという思いもとても強いと感じ、いいなと思った。ボボ・ディウラソーで知り合った人達は経済的に困っているにもかかわらず、家族の一員だということで私達に全て分けてくれたことに感動した。彼らはいつも笑顔で元気いっぱいだった。逆にフランスでは道があるいていと笑顔な人は一人も見かけない。そういう所がとても気に入った。生徒達の熱心さに私もがんばろうと思い、やる気がでた。また、この経験で私は成長し、新しい価値観を身に付けた。この経験によって私の志望動機が変わった。実際の世の中の不公平さを実感し、途上国の発展に役立つ仕事がしたくなった。

今でも友達や家族と話していると、もう一回行ったんだからいいんじゃないのによく言われれば、逆に自分も行きたくなくなったという人もいる。確かに私も前は どうしてわざわざ水も電気もない所に行かなくてはならないか理解できなかった。でも今ではまた絶対に行きたいという気持ちがあり、来年の夏友達と行く予定だ。そして、ブルキナファソ以外の国にも行ってみたい。

以上